

神様の出番

[マタイによる福音書 5章 1～12節]

イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渇く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

[1] 「認められたい」

私たちは誰でも「認められたい」という気持ちを強く持っていると思います。「認められた」と思う時に、人間という存在は「幸せ」を感じるのではないのでしょうか。そして思えば私たちはいつしか「認められるために頑張る」という「教育」を受けているような気がします。つまり成績が良いと認められる、また、スポーツが得意だと認められる。オリンピックというのも、あれ、一番を決めるゲームですよ。金メダルを取る。或いは優勝する。それはその人にとって最高の「幸せ」、天にも昇る気持ちでしょうね。私たちもそういうのを見ると嬉しくなるのは、どこかで「自分も評価して欲しい」と思っているのでしょうか。プロ野球やサッカーのごひいきのチームが調子が良いと嬉しいという人もいらっしゃるでしょうけれども、何か自分が勝ったかのような疑似体験が出来るから何かの心理学の本で読んだことがあります。

私たちは、「幸せ」ということを、どこか「勝負に勝つこと」とか、「上昇志向」といったものと結びつけている所があるのではないのでしょうか。しかもそれは「努力」といったものと裏腹ですから、そのような価値は根強いものがあると思

うのですね。知らない内にそういうレールに乗っていると思います。「努力する者は幸いである」その結果「認められる者は幸いである」。聖書もそういう言葉が書かれていたら、その通りだとすんなりと入ってくるのだと思います。

ところが今日の聖書の箇所、イエス・キリストは、山の上から多くの群衆たちや弟子たちに、こう言われたのです。—「**心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである**」(マタイ 5:3)。とても驚いたと思います。これまで聞いたことのない言葉であったと思います。

[2] 業績・成功・うわべに左右されない「幸い」

この言葉は、元々は「**幸いである**」という言葉から始まっています。「**幸いだ。心の貧しい人々は**」。この「**幸いだ**」は、ここから8つ続いています。そのどれもがいわゆるこの世の中での成功や評価といった方向性とは**全く違う「幸い」**を語っていると思います。主イエスは何とおっしゃったのでしょうか。4節以下も読みますと、

「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渇く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

これらは「一番になる」幸いではありませんね。まだ誰もが羨むような、素敵と思ってもらえる、外側に現れる幸せ・ファッションショーのような幸いでもありません。むしろそれとは逆で、外側には見えない、**心の内側**を主は見ておられて、**その心を抱えている私たちを「幸いだ」とおっしゃる**のですね。旧約聖書にもありました。「人は、目に映ることを見るが、主はその心を見る」(サムエル記上 16:7)。神様の目とは、私たちの**業績・成功・うわべに左右されない**のです。これは素晴らしいことです！ 神様は、主イエス様は、「理想」で私たちをご覧になりません。あるがままの「心」を持った私たちとして、私たちをご覧になります。

ここで言われている「幸い」は、頭で納得できる「幸い」とは違うものだと思います。ここで主が語られている幸いとは一英語で「幸せ」は「ハッピー」ですがけれども、とても「ハッピー」とは言えない状態ばかりだと思います。悲しみに沈んでいたり、満たされない思いを抱えていたり、今のミャンマーの市民など本

当にそうだと思いますけれども、平和が実現している状態とは逆の状況に置かれていたり、はたまた、神様を信じるが故に迫害を受ける、命の危機に直面させられるそのような状態の者たちに対して「その者は幸いだ」とイエス様はおっしゃるのです。「それ自体」は、少しもハッピーではないにも関わらず、です。

けれどもここが、聖書の聖書たるどころだと思います。初めの「心の貧しい人々」の「貧しい」というのは、「欠け」・「欠乏」ということのようにです。自分ではその欠乏を補うことが出来ないということに気付いた人です。ですから、他の訳ですが（フランシスコ会訳）ここをこう訳しています。「**自分の貧しさを知る人は幸いである。天の国はその人たちのものである**」。「自分の貧しさ」を知るということは良いことです。そこから私たちは、自分で自分を満たす試みを捨てて、神様を求め始めるからです。

あの**アウグスティヌス**は『告白』の中で言いました。「**私たちの心は、神様でなければ決して埋めることが出来ない穴、空洞があるのだ**」。これは「心の貧しい者」という意味をよく示してくれていると思います。

神様は私たちが神様を求めることを待っておられるのですね。自分の「欠乏」「欠け」「弱さ」を知って、神様を私の人生の中にお迎えすること。求めれば、神様は必ず来て下さる、イエス様は来て下さる。「**天の国はその人たちのもの**」。主イエス様の確かな約束の言葉です。

4節以下も皆、**私たちの心の欠乏、欠け**を、イエス様は見ておられます。4節にある「**悲しみ**」もそうです。これは不意打ちのように襲ってきます。しかも全くなくなるということではなく、そこからの癒しは簡単ではありません。また悲しみは、私自身の最近の家族を失った体験からも思いますが、**自分自身の罪や後悔**というものとも結びついていることが多いのです。5節以下の「**柔和な人々**」「**義に飢え渴く人**」「**心の清い人々**」「**憐み深い人々**」というのは、誠実に生きていこうとする人々に違いありません。けれどもそのような人々は苦勞すると思います。ともすると、うまくこの世の流れに乗れない、空気を読むことも不得手で、誤解もされ、この世の競争という所からは置いてきぼりになってしまうこともある人々かもしれませぬ。私たちは誠実に生きようとすればするほど呻きます。けれども、ちゃんとイエス様はその心を知って見ておられる。**あなたは間違いなく覚えられていますよ**、ということが言われているように私は思いました。周りの者たちがあなたを認めなくても、**神様があなたを認めて下さる、だから「幸いだ」とおっしゃるのです**。たとえ**迫害を受けることがあっても**、大丈夫！ 神様こそがあなたの味方、「**喜び、喜べ。天においてあなたの受ける報いは大きい**」(口語訳)というのですね。

[3] 十字架から来る約束の言葉

私はこの8つの幸いの言葉は、弱く、罪深い私たち一人ひとりを愛して止まない、そして、この地上にあってイエスと共に上を見上げながら生きてゆける、その約束の言葉だと思います。私たちは弱い時こそ強い。不思議な方程式が私たちには与えられているのです。

菊地吉弥牧師という、既に召された名牧師（日本基督教団下谷教会元牧師、初代「いのちの電話」理事長）が、「山上の説教」からの説教が残っています。最後に、その中から一部をご紹介します。これは「義に飢え渴く者は幸いである」(5:6)という箇所からです。菊地先生は、自分の出生が、昔で言う妾の子供だったということ、父親がいないということから悩み、いじめられ、若い頃、苦しみの中からイエス様と出会って、バプテスマを受けました。しかし、その後、大きな悩みにぶち当たったというのです。

「これからの生は、今まで死んでいたのだから与えて下さった方のものだ。私は今までの自分とは全く違った人間になって神の義を求める新しい生に向かって突進しました。しかし、私は神の義しさを求めれば求めるほど、自分の現実に失望せざるを得ませんでした。義人になるどころか、いよいよ自分が罪人であることを発見して、罪の意識が深くなってゆきました。これは、それまで自分中心に生きておった者のうちに、主イエス・キリストが生きて、その主が私の罪の闇の生活を照らし出してくれるようになったからです。私は醜い自分に呻きました。神の敵は、外にあるよりも、自分の内にあるということがわかりました。私はそれと格闘して敗れるだけなのです。…しかし私のこの闘いには、そこで絶望して終わりかというところではなくて希望がありました。私には確かな逃れの里があったのです。それは主イエス・キリストの十字架でありました。私は確かに自分に絶望しました。しかし、あそこに、主イエスが私のためにもう既に十字架において、私のための私の義を、すなわち神の前に私の救いのための義を既に完成してくれている。だから私は、罪人としてその十字架の陰に立てばよい。どんなに私の罪が深くても、その私のために主イエスが十字架にかかり給うたのだから、私の救いはもう既に決まっている。だから私は大丈夫だ。こう思うことは、私にとって非常に救いでありました。そして、神の義を求めて罪の意識に成長すればするほど、この恩寵の確かさ、救いの確かさがいよいよわたしのうちに大きく確実にあってゆくのです。…だから主イエスは、「義に飢え渴く者は、満ち足りる」といったのではないのでしょうか。」

本当に「アーメン」だと思います。お祈りを致します。